

内閣総理大臣
野田佳彦 殿

阿武隈の復興のありかたについて

平成 24 年 1 月 3 日
千葉大学山木屋後方支援チーム一同

福島第一原子力発電所事故により不意に暮らしが奪われてしまった地域があるという事実直面し、我々千葉大学の有志は研究者として役割を果たしたいと考え、福島、阿武隈地域を注視し、通って参りました。

千葉大学では震災前からの川俣町との交流に基づき、計画的避難区域である山木屋地区で地域の方々と協働で様々な調査や議論を重ねております。その過程で感じざるを得ないことは、国と地域の視線が交わらないことです。国の施策がなかなか地域で使えない、国の調査が何をやっているかわからないという声を聞き、我々はインタープリターとして、知りうる情報、私たち自身のデータを地域に可能な限りお伝えしながら、住民の皆さんの声を聞いて参りました。

阿武隈の民は里の生活と密着した森林の汚染を大変重大に考えています。里の田畑は森とつながっており、暮らしは森と里の循環から成り立っています。都市を主に想定された住宅地中心の対策だけでなく、農山村地域を包括的にとらえた除染、復興を推進していただきますようお願い申し上げます。地域の復興、人の心の復興ができるまで私たち研究者は阿武隈に通い続ける所存です。

大学は地域と密接に連携しながら調査、対策、提言を行う機能を有していると考えます。千葉大学は川俣町と連携していますが、例えば、日本大学は飯舘村の方々と連携し様々な後方支援を行っております。その他の地域でも大学との草の根連携がたくさん進行しております。新しい年を迎え、我々大学の研究者は社会との分断を修復するために、さらなる努力をする所存ですが、その過程として国と地域を結ぶ役割を果たしたいと考えております。

阿武隈にはチェルノブイリ地域より高密度の暮らしがそこにあります。この暮らしを奪うことも、忘れ去ることもできません。川俣町では起きてしまったことは受け入れ、前向きに未来を考えようと努力しております。どうか、地域の声に耳を傾け、“地域の暮らしスケール”の再生計画が地域とともに推進できますよう、重ねてお願い申し上げます。